

Y10b 埼玉大学望遠鏡を用いた星空観望会の報告

大朝由美子、大島吾一、高原佑典、星久樹、荒谷健太、榎本藍子、佐藤太基、高井大地、中里佳織(埼玉大学)、加藤卓磨(埼玉県寄居町立男衾小学校)、鈴木愛理(板橋区立教育科学館)、ほか埼玉大学教育学部天文学研究室一同

埼玉大学には、教育学部屋上(8-9階相当)に天体観測ドームと55cm望遠鏡が設置されている。この55cm望遠鏡は2012年5月に新設され、系外惑星のトランジット、前主系列星の変光、月の地球照、ガンマ線バーストなどの観測のほか、光・赤外線天文学研究教育拠点の一つとして大学間連携共同研究にも利用されている。一方、教育学部所有の望遠鏡であるため、大学教育研究用だけではなく、小中高校生や教員を対象とした実習や、地域市民への星空観望会にも活用されている。

埼玉大学教育学部天文学研究室では、2010年秋から毎月1-2回定期的に星空観望会を開催している。2012年12月時点で、(2009年度の試行も含め)41回実施し、その間の参加者はのべ1500人弱である。この星空観望会は学内外への教育・アウトリーチ活動という位置付けだけでなく、教員養成系学部としての教育学部生への教育という側面もあり、主に大学4年生が企画の中心となって、大学院生/学部生らで運営・広報・観察指導が行われている。55cm望遠鏡(2011年12月までは旧40cm望遠鏡)と、数台の小型望遠鏡や双眼鏡を用いて、月・惑星・二重星・メシエ天体など、その時の天候に応じた天体を観望している。さらに、学校や避難所、病院などに赴き、星空宅急便として出前観望会を行い、広く一般市民への教育普及活動について実践的に学ぶ機会としている。今後は、埼玉大学を中心に開始した理数系教員養成拠点構築事業(CST)の授業でも取り入れる予定である。本講演では、これまでの実施状況と結果、参加者からの感想をふまえた効果や課題、今後の展望について議論を行う。